

序

高度進行消化器癌に対する手術は伝家の宝刀

癌手術において前世紀の手術の潮流は拡大手術であり、血管合併切除を中心とした他臓器合併切除など、外科技術を駆使して根治率を上げる努力がなされてきた。しかし、前世紀末から今世紀にかけ多くの予防的拡大手術の有効性をみる無作為化比較試験が行われ、そのほとんどは拡大手術の根治率向上において否定的な結論であった。

今世紀の潮流は低侵襲手術と、化学療法などと手術を組み合わせる集学的治療である。むやみな拡大手術は避け、現代の拡大手術は必要な時にのみ最適のタイミングで行われるようになった。ただ、化学療法は進歩しても消化器癌において唯一の根治治療が切除であることに変わりはなく、その意味で高度進行消化器癌に対する手術は伝家の宝刀といえるだろう。従来から行われてきた正攻法の拡大手術や再発巣に対する手術に加え、化学療法により切除不能であった進行癌が切除可能となり根治を狙う conversion surgery, 化学療法の流れのなかで予後の延長を図る adjuvant surgery など、手術の役割は現在でも重要である。

今回の臨時増刊号で取り上げる手術の多くは、通常では切除適応外、もしくは不能とされる高度進行消化器癌症例を対象とするものである。切除不能癌を切除し治すことは癌外科医にとって永遠のテーマであり、醍醐味であろう。本特集が、高度進行消化器癌に対する手術の理論、適応、手術手技を多くの外科医に伝え、それぞれの外科医魂に火を灯すことを期待したい。

2019年3月

「手術」編集委員

齋浦 明夫

順天堂大学肝胆膵外科教授